

東日本大震災が 大学生の生活観・人生観に与えた影響(10) —9回にわたる全国定期調査の分析—

○ 木野 和代 ・ 大橋 智樹
(宮城学院女子大学 学芸学部; 会員)

キーワード: 災害、価値意識、地理的距離

Undergraduates' outlook on life after 2011 Tohoku earthquake (10)

Kazuyo KINO, Tomoki OHASHI

(Miyagi Gakuin Women's University)

Key Words: disaster, value consciousness, geographical distance

*本研究は、JSPS科研費 JP15K11938 の助成を受けたものです。

問題と目的

■ 東日本大震災

- 地震・津波・原子力災害までを含む**複合的な大規模災害**
- その被害状況や安否情報、その後の状況は、大震災発災直後から、全国的に、各種メディアが連日報道
- ⇒被災3県(岩手・宮城・福島県)のみならず、
他地域の人々も、**大きな衝撃**

復旧支援

人命救助

電力不足

ボランティア活動

搜索活動

放射能汚染

義援金

支援物資

仮設住宅

避難生活

■ 大震災の直接・間接的経験

- ⇒ 日常生活意識や行動の変化
 - 特に青年期にある大学生にとっては、人生観や将来展望への影響も?
- ⇒ 被災地からの地理的距離による差?
 - 心理的な距離を反映?
 - Psychological Typhoon Eye 効果? (e.g., Li et al., 2009, 2011)
- ⇒ 時間経過: 経験の風化の懸念
 - 災害大国において、今後の社会を担う大学生世代の震災後の価値意識を、全国的かつ継続的にとらえることには一定の意義

問題と目的

■ 目的

震災後の大学生の価値意識が

- 時間経過と
 - 被災地からの地理的距離により
- どのように変化するかを検討

■ これまでの研究

- 研究(1): 端緒として、震災後の生活意識に関する自由記述調査を複数地域で実施。
(木野他, 2012; 大橋他, 2012)
- 研究(2): 研究(1)の記述内容を参考に、震災後の価値観の変化を地域差を考慮して継続的に検討していくための質問項目を作成。
(木野他, 2019)

■ 本報告

- 研究(2)で作成した項目を用いた継続調査の経過報告
 - 初回(2013年1月末実施)から第9回(2020年1月末実施)までの調査データを使用
- 価値意識の変化を、以下の点を考慮して分析
 - 時間経過
 - 地理的距離
 - この間に発生した大規模自然災害

継続的な定期調査により、各地で甚大な自然災害が生じた際には、各災害の影響を検討することが可能

方法

1. 調査対象・手続き

● 初回データ:

- 対象: 24都道府県の34大学の学生1,992名。
- 2013年1~2月に、各大学で個別あるいは授業時間中に集団で実施。
- 18~25歳の学生の回答を抽出。

● 2回目以降のデータ:

- 2014~2020年1月末、および、2016年7月末にWEB調査を委託実施。
- 対象: 18~25歳の学生
各回、各エリアから男女50名ずつ計600名。ただし、全て同じ回答など不適切と考えられたデータは分析から除外。

熊本地震の3ヶ月後に追加調査を実施

2. エリア間比較の

分析対象 (表1)

- 所属大学所在エリアと出身エリアが一致する者のみ。

表1. 分析対象者数

エリア	2013年1月末		2014年1月末		2015年1月末		2016年1月末		2016年7月末		2017年1月末		2018年1月末		2019年1月末		2020年1月末	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
1	41	108	23	33	25	30	27	34	34	28	24	26	30	38	29	36	31	33
2	89	198	26	21	17	27	27	34	29	22	25	32	26	34	28	26	27	30
3	109	395	36	39	32	38	38	42	41	46	39	42	38	37	45	40	47	39
4	57	69	30	29	28	36	34	37	35	41	35	40	35	28	38	41	42	34
5	66	66	31	39	29	29	30	37	27	43	35	40	32	38	34	39	36	41
6	94	134	36	38	30	39	39	40	43	42	43	40	42	43	42	42	37	49
計	456	970	182	199	161	199	195	224	209	222	201	220	203	218	216	224	220	226

方法

3. 被災地からの地理的距離 (図1)

- 47都道府県を被災3県との近接度と地方区分を考慮して、6エリアに分割。

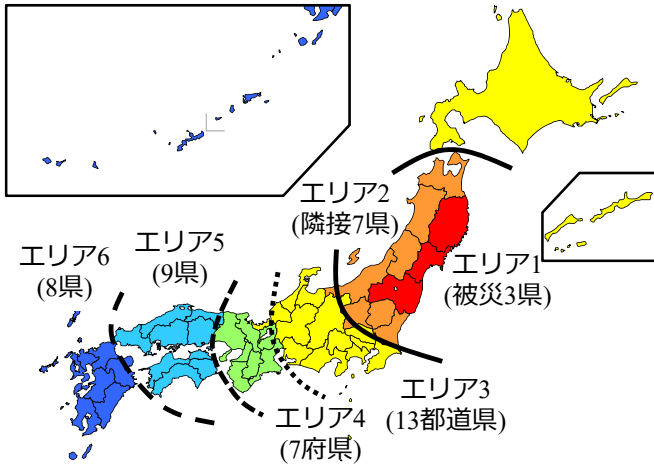


図1. 被災地からの地理的距離6区分

4. 調査内容

- 大学生の価値意識(表2)
 - 震災観、生活観、人生観などを問う42項目
- 精神的不健康度(表2)
 - PTSD診断尺度 (林,1995)から4項目
- その他:
 - 出身都道府県、年齢、性別
 - 大学所在地【WEB調査のみ】
 - 本人、身近な人の被災経験 (内容を自由記述)【2016年以降】

* * 5段階評価
木野他(2019)参照

✓ 木野和代・大橋智樹・松浦光和 (2019). 東日本大震災後の大学生の価値意識をとらえる試み—定期的調査の継続に向けて—宮城学院女子大学研究論文集, 128・129, 53-69. doi/10.20641/00000484

方法

表2. 項目紹介(α係数は初回調査から順に調査回ごとの値)

<p>震災観 (α=.68, .79, .76, .76, .81, .79, .81, .77, .77; 5項目)</p> <p>東日本大震災と同じような自然災害が、自分が生きている間に、必ずまた起こると思う 日本は、東日本大震災で学んだ教訓を、決して忘れてはならない 東日本大震災は、世界を大きく一変させるような出来事だったと思う 東日本大震災は、自分の人生に多大な影響を与えた 東日本大震災は未曾有の災害なのだから、社会はこの経験のすべてを活かすべきだ</p>	<p>対人・社会観 (α=.49, .38, .24, .40, .33, .38, .37, .35, .41; 5項目)</p> <p>人は、誰かと互いに支え合って生きていくものだと思う(※) 決断が必要な時には、少数意見が無視されることがあってもやむを得ない いざというときでも、知らない人同士だとなかなか助け合えないと思う 人の示す関心など、ささいなきっかけで薄れてしまうものだ すべての人が等しく幸せを感じられる社会など、実現できないと思う</p>
<p>人生観 (α=.66, .79, .78, .76, .79, .75, .81, .74, .77; 4項目, 1項目削除)</p> <p>その時々状況に柔軟に対応しながら生きていきたいと思う 先々のことを見越して計画的に生きていきたいと思う いかに生きるかを真剣に考えながら人生を送るべきだ 生きることを意味を見出せるように一生を過ごしたい 高望みをせず、無理のない生き方をしたいと思う</p>	<p>安全観 (α=.34, .46, .48, .54, .61, .56, .53, .58, .53; 5項目)</p> <p>少しでも危険があるものは、社会から排除すべきだと強く思う 自分や身近な人の安全のためならば、その他のことは犠牲にしてもよい 安全については、他人任せにせず、できるだけ自分で確認したい 危険性についての本当の情報はなかなか公表されないものだと思う 万が一の事態に備えて、普段から準備しておくことはとても重要だ</p>
<p>生活観 (α=.63, .77, .76, .78, .78, .82, .78, .75; 7項目, 1項目削除)</p> <p>普通の生活で感じる“普通の幸せ”を大切にしながら毎日を過ごしたい 日々の生活に本当に必要であるかどうかを考えて消費すべきだと思う 家族や友人たちとともに過ごす日常が、なによりも大切だと思う 多少不便になったとしても、地球や社会のことを優先に考えて生活すべきだ 高度な知識よりも、日々の暮らしに活かせる知恵の方が大切だと思う 食事は一口一口をしっかりと噛みしめ味わうようにしている マーケット・コンビニに日用品があることを、とてもありがたいと思う 自分の故郷を離れても、災害が少ない地域で生活したい</p>	<p>自然観 (α=.42, .58, .62, .57, .62, .60, .57, .51, .42; 5項目)</p> <p>自然現象を人間が制御することなど、絶対にできないと思う いまは多少不便でも、子々孫々のために自然を破壊すべきでない 自然は脅威よりも、さまざま恵みを人間に与えてくれると思う 種の絶滅も自然の営みの一部であり、特に問題にすべきことではないと思う(※) 自然は最大の敬意をもって接するべき存在である</p>
<p>地域観 (α=.68, .81, .77, .77, .81, .81, .82, .79, .78; 3項目, 1項目削除)</p> <p>地域の祭りや行事に参加することで、その地域を盛り上げていくことは大切だと思う 地元の産品が広まっていくことは、誇らしいことだ 自分の生まれ育った土地には、特別な愛着を抱くものだ 郷土の歴史に特別な関心がある</p>	<p>死生観 (α=.54, .64, .63, .68, .65, .64, .69, .61, .60; 5項目)</p> <p>人は死んでも、誰かの思いの中に生き続けるものである 天国や地獄など、死後の世界の存在を強く信じる 人はいつ死んでもおかしくないような儚い(はかない)存在なのだ強く思う 与えられた命をきちんと生きることが使命だと感じる 死はとても身近なものである</p>
<p>精神的不健康 (α=.66, .73, .65, .69, .72, .77, .72, .71, .72; 4項目) ※この1ヶ月間の体験をたずねた</p> <p>ものごとに敏感になって、眠気も全く起きない わずかなことにもひどく驚く ほかの人といっても、その人との距離が遠く感じられる 先のこと、将来のことを考える気になれない</p>	<p>回答: 「1=全く当てはまらない」 「2=あまり当てはまらない」 「3=どちらとも言えない」 「4=やや当てはまる」 「5=とても当てはまる」</p>

結果と考察

1. 尺度の構成

- 想定された下位尺度構成に従い
 α 係数を算出 (表2参照)

➢ 震災観、人生観、生活観、地域観、精神的な健康度は、一部項目の削除を行い尺度構成

➢ 対人・社会観、安全観、自然観、死生観では、十分な信頼性が確認できなかった

⇒ 分析対象外

- 各下位尺度得点の算出

➢ 構成項目の評定値の合計を項目数で除算
➢ 得点可能範囲は1~5

* カテゴリ内の項目に、多様性をもたせることを重視した結果と考えられる。尺度として扱うよりも項目レベルでの分析が本研究の趣旨に適合すると思われる。

7

結果と考察

* 下位尺度ごとに、
調査時期(6)×エリア(6)×性(2)の分散分析
* ANOVA4により、5%水準で検定

2. 価値意識に関する比較

① 震災観の主な結果 (図2)

a. 調査時期の主効果

- 2013年1月末>2014年1月末~2019年1月末
- 2019年以降上昇傾向

b. エリアの主効果

- エリア1・2>3・4・5・6

c. 性の主効果:女>男

d. 交互作用(時期×エリア):有意

「震災観」:

東日本大震災の経験が個人の生き方や社会のあり方に与えた影響力に対する考え・態度。
高得点ほど経験・影響力を高く評価。

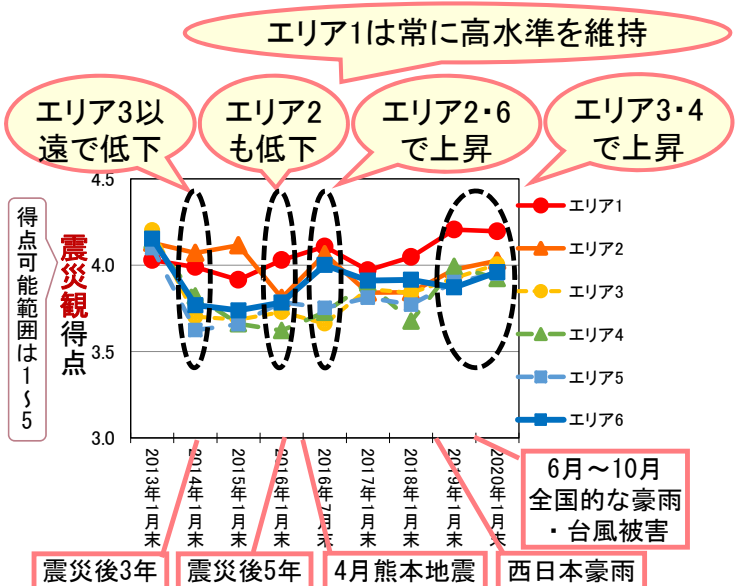


図2. エリア別の震災観得点の変化

8

結果と考察

② 人生観の主な結果 (図3)

- a. 調査時期の主効果
 - ・ 2013年 > 2014年~2019年
 - ・ 2020年 > 2014年・2015年
- b. エリアの主効果:
 - ・ エリア2 > 3・4
- c. 性の主効果: 女 > 男
- d. 交互作用(時期×エリア): (有意傾向)

* 震災後3年(2014年)~2019年は、低下
 * 2020年に上昇傾向で、震災後3・4年目より高い

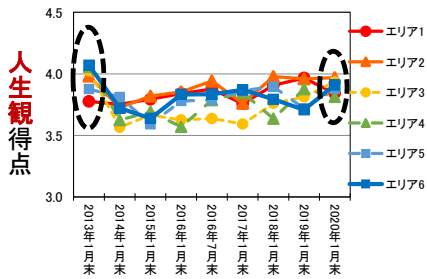


図3. エリア別の人生観得点の変化

③ 生活観の主な結果 (図4)

- a. 調査時期の主効果
 - ・ 2013年 > 2014年以降
 - ・ 2019年・2020年 > 2014年・2015年
- b. エリアの主効果: エリア1・2・6 > 3
 エリア1・2 > 4
- c. 性の主効果: 女 > 男
- d. 交互作用(時期×エリア): 有意

* 人生観と同様の傾向

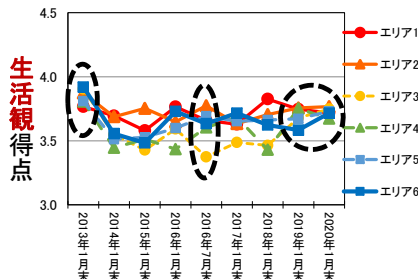


図4. エリア別の生活観得点の変化

* エリア1・2: 大きな変動がなく、維持。
 * エリア3: 震災後3年~低下。2019年~上昇傾向
 * エリア4: 震災後3年から低下。2019年は高め。
 * エリア6: 2016年1月に一時的に上昇(熊本地震前に?)
 * 2016年7月: エリア3が他のエリアより低い。

結果と考察

④ 地域観の主な結果 (図5)

- a. 調査時期の主効果
 - ・ 2013年 > 2014年以降
- b. エリアの主効果:
 - ・ エリア1・2 > 5 > 3・4
 - ・ エリア6 > 3・4
- c. 性の主効果: 女 > 男
- d. 交互作用(時期×エリア): 有意

* 震災後3年(2014年)以降低下。

* エリア3・4が低め。
 ⇒ 首都圏・関西・東海地方といった都市部ゆえか?

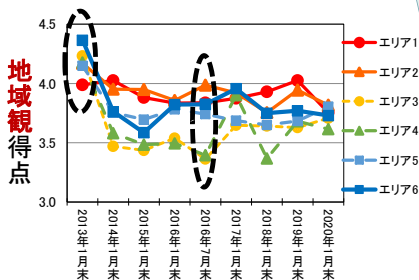


図5. エリア別の地域観得点の変化

* エリア1・2: 大きな変動がなく、維持。
 * エリア3・4・5・6: 2014年以降、エリア1・2よりも低め。
 * 熊本地震3ヶ月後(2016年7月)には、エリア3・4でエリア5・6との間にも差。

「人生観」:
 生きることと真摯に向き合い、計画性と柔軟性をもってよりよく生きていこうとする態度を問う項目からなる。
 高得点ほど、人生と向き合う態度が強いことを意味する。

「生活観」:
 平穏な日常生活を送ることができること、ありがたさおよび生活に必要なものについて慎重に検討する姿勢を肯定する態度を問う項目からなる。
 高得点ほど、肯定的態度であることを意味する。

「地域観」:
 地元への愛着を肯定する態度を問うものである。
 高得点ほど、肯定的態度であることを意味する。

結果と考察

* 価値意識と同様に分散分析

3. 精神的不健康度に関する比較 (図6)

a. 調査時期の主効果

- 2013年>2014年以降

b. エリアの主効果:

- エリア5>2

c. 性の主効果: 女>男

* 全体に、心理的健康度は悪くない
 * 初回に比べて、それ以降は、健康度が低い
 ⇒ 調査方法による差の可能性?
 (紙筆版の方が健康度が高い?)

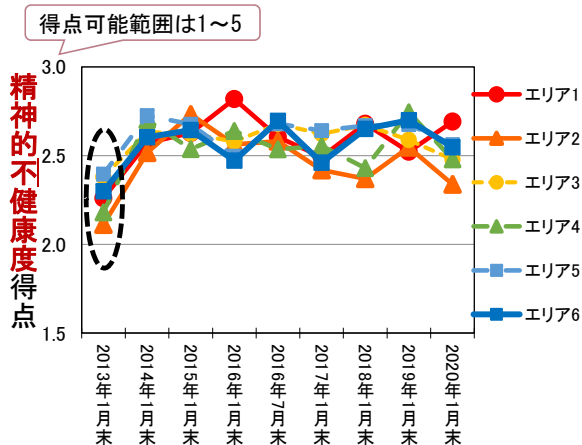


図6. エリア別の精神的不健康度得点の変化

「精神的不健康」:

「回避」と「生理的過緊張」の状態が、過去1か月間に続いてきたかどうかを問う。
 高得点ほど、不健康であることを意味する。

結果と考察

4. 大災害の経験

※2016年1月より質問

■ 本人 (図7)

- エリア1: 最高率。常に、80%以上
- エリア2: エリア1に次いで高率。30~50%程度。
- エリア6: 2016年7月以降増加。
- エリア3以遠: 2019・2020年に増加。

■ 身近な人 (図8)

- 「本人」と同様の傾向。
- ただし、エリア4がエリア2程度に高率。
- ※ 記述があいまいで、具体的な災害を特定できない回答あり

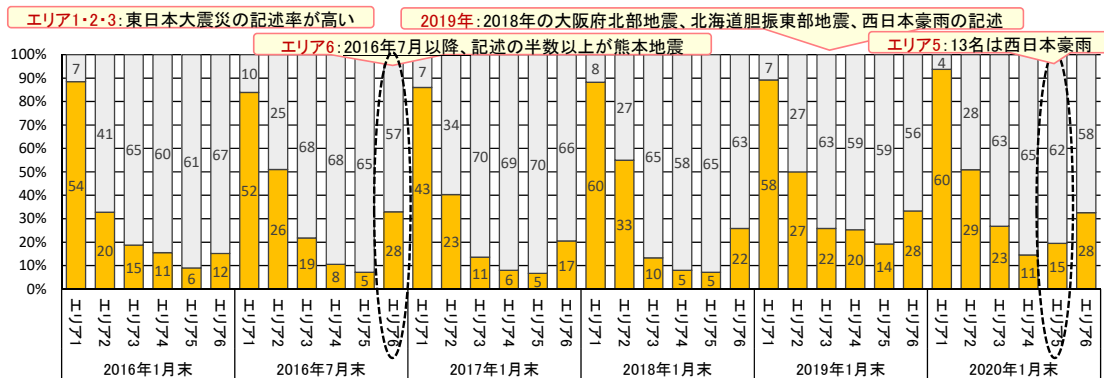


図7. これまでに大きな災害に直接遭遇した(を経験した)か

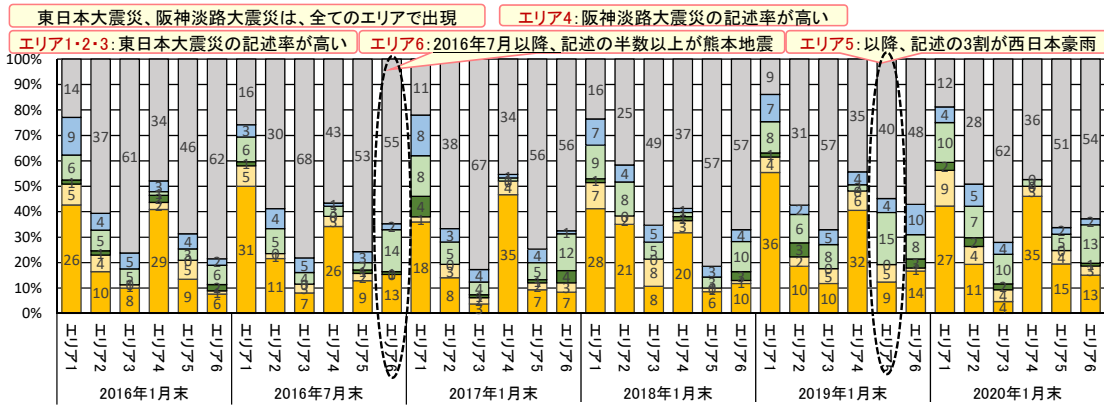


図8. 身近な人の大きな災害経験

結果と考察

5. 大災害の経験による比較

* 2016年1月より質問に追加
⇒ 2016年以降のデータのみ分析

表2. 大災害の経験人数

	本人の経験 (経験した)	本人の経験 (はい いいえ)	
		はい	いいえ
身の近 きな 経験 者	親・祖父母 兄弟・友人・その他	407 233	284 169
	身近経験なし	191	1294

■ 各価値意識について

本人の経験(あり/なし)
× 身近な他者の経験(親など/兄弟など/なし)
の分散分析

出現度数を考慮し、調査時期とエリアは独立変数から除外

表3. 2要因分散分析の結果

	本人の経験	身近な他者の経験	交互作用
震災観	あり>なし	あり>なし	n.s.
人生観	n.s.	あり>なし	n.s.
生活観	n.s.	あり>なし	n.s.
地域観	n.s.	兄弟など>親など>なし	n.s.
精神的不健康	n.s.	n.s.	n.s.

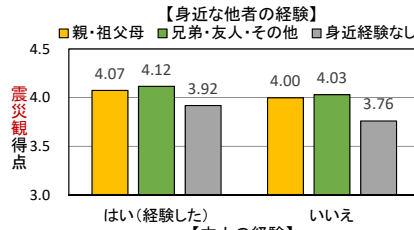


図9. 本人・身近な他の経験別の震災観の平均

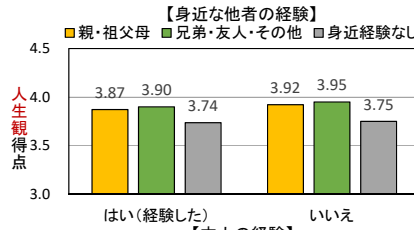


図10. 本人・身近な他の経験別の人生観の平均

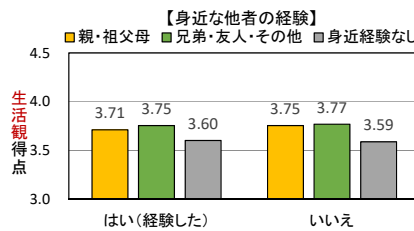


図11. 本人・身近な他の経験別の生活観の平均

- 震災観: 身近な他者の経験だけでなく、本人の経験がある方が高得点。
- 他の価値意識では、身近な他者の経験のみが影響
- 地域観: 身近な他者が誰かによっても影響に差

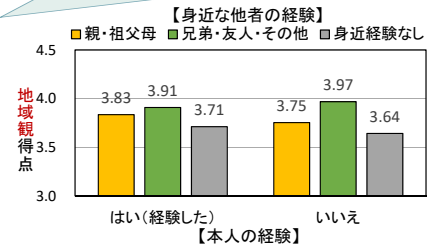


図12. 本人・身近な他の経験別の地域観の平均

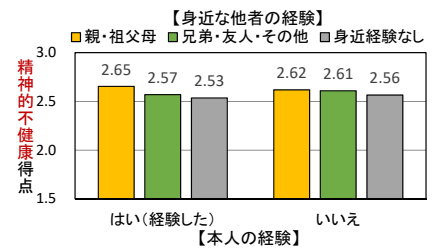


図13. 本人・身近な他の経験別の精神的不健康の平均

本調査への回答者には、本人および身近な他者の経験により、精神的健康度に影響は見られなかった。

結果と考察

■ 価値意識の変化

● 震災観について

- エリア1(被災3県): 時期を問わず高水準を維持
- エリア2(隣接7県): 震災後5年の2016年1月に一時的に低下。
- エリア3以遠: 震災後3年の段階で低下。
- しかし、2016年7月に隣接7県と九州地方で上昇。
- 2019年・2020年には全国的に上昇傾向。

- 被災3県では、時期を通じて、回答者の8割以上が東日本大震災を経験していることから、常に高水準であったと考えられる。
- 隣接7県では、エリア3以遠より遅れて震災5年後から意識の低下が始まったと考えられる。しかし、震災の記憶はまだ活性化されやすい状態にあり、2016年4月の熊本地震発生によってその記憶が想起されて震災観が上昇したと解釈できる。
- 九州地方では、震災3年後から意識低下が見られたが、地元・近隣県での熊本地震の経験によって震災への意識が強まったと解釈できる。
- 2019年以降の上昇傾向は、2018年には大阪府北部地震(6月)、北海道胆振東部地震(9月)といった大規模地震に加え、「平成最悪の水害」と報じられた西日本豪雨(7月)と、全国でたびたび災害が発生したことが影響した可能性が考えられる。
- 以上から、震災観の変化には、震災への心理的距離の影響が考えられた。

結果と考察

● 人生観・生活観・地域観について

- ◆ 人生観・生活観に関しては、震災観と同様に2019年～2020年で上昇傾向がみられた。
 - 相次ぐ水害が影響した可能性が考えられる。
- ◆ しかし、震災観ほど、災害の影響を明確に読み取ることが困難であった。また、価値意識の側面によっても、変化の様相が異なった。
 - 震災観は、他の側面に比べて、災害が起こった地域との連動性が特に表れやすい変数であると考えられる。



- 人生観と生活観は、生きることと結びついた価値意識である。しかし、前者は将来を意識したものであるのに対して、後者は日々の生活を意識したものである点が異なる。日々の生活に密着した生活観は、災害後の不便な生活によって意識化されやすく、人生観に比べて時期や地域による変動が表れやすかったのではないだろうか。
- 地域観については、災害との連動性を読み取りがたい変数であった。都市化の程度や地域の特色など、他の要因が反映されやすいのではないだろうか。

15

結果と考察

■ 本人および身近な他者の被災経験の影響

- ① 価値意識には、**身近な他者の経験**の影響が見られた。
- ② **震災観**でのみ、本人の経験の効果も見られた。

- ◆ 身近な他者の経験は、経験からの教訓が言語化されて伝えられたり、苦境を一步引いて共感的に観察することになるため、価値意識に影響を与えやすいのではないだろうか。

■ 精神的健康について

- ◆ 全体に不健康な結果ではなかった。
- ◆ 価値意識とは異なり、エリアによる差異、本人や身近な人の大災害経験の有無による差異は見られなかった。
- ◆ 差異が見られたのは、調査時期の要因のみであった。震災後3年で、不健康度が上がったが、調査実施方法の違いによる結果とも考えられるため(北折・太田,2009)、時期によって、健康度が下がったと結論づけるかどうかは、議論の余地があるだろう。

※ 2020年上期における新型コロナウイルス感染拡大の影響を検討するため、本年は7月にスポット調査を計画している。

16

抄録(登録内容)

- 東日本大震災後の大学生の価値意識が被災地からの地理的距離と時間経過によりどのように変化するかを検討するために、全国調査を実施してきた。被災地からの地理的距離は、被災3県との近接度と地方区分を考慮して都道府県を6エリアに分割した。調査時期は、2013年以降毎年1月下旬～2月上旬および2016年7月であった。調査内容は、震災観、生活観、人生観などの価値意識に加え、精神的不健康度を問う46項目であった(木野他(2019)参照)。
- 震災観の分析の結果、被災3県(岩手・宮城・福島県)では時期を問わず高水準を保っていたが、その隣接7県では震災5年後の2016年1月に一時的に低下した。それ以外のエリアについては、震災3年後の段階で低下が見られた。時間経過に伴い地理的距離の効果が表れたといえる。しかし、2016年7月に隣接7県と九州地方で上昇した。また、2019年・2020年には全国的に上昇傾向を示した。前者は2016年4月の熊本地震の影響、後者は2018年の西日本豪雨、2019年6月～10月の全国的な豪雨・台風被害が影響している可能性が考えられた。生活観・人生観についても同様に2019年・2020年の上昇傾向が見られた。